

# 遠くで鳴る雷

小川未明

青空文庫



二郎は、前の圃にまいた、いろいろの野菜の種子が、雨の降った後で、かわいらしい芽を黒土の面に出したのを見ました。

小さなちようの羽のように、二つ、葉をそろえて芽を出しはじめたのは、きゅうりであります。

そのほかにもかぼちや、とうもろこしの芽などが生えてきました。

きゅうりは、だんだんと細い糸のようなつるを出しました。お母さんは、きゅうりの植わっているところに、たなを造つてやりました。たなといっても、垣根のようなものであります。それに、きゅうりのつるはからみついて、のびてゆくのであります。

やがて、ほかのいろいろな野菜の芽も大きくなりましたが、いつしかきゅうりのつるは、その垣根にいつぱいにはいまわつて、青々とした、厚みのある、そして、白いとげのようなうぶ毛をもつた葉がしげりあつたのであります。

そのうちに、黄色の、小さな花が咲きました。その花のしぼんだ後には、青い青い、細長い実がなつたのであります。

二郎は、毎年、夏になると、こうしてきゅうりなるのを見るのでありますが、その

初<sup>はつ</sup>なりの時<sup>じぶん</sup>分<sup>ぶん</sup>には、どんなにそれを見る<sup>みる</sup>のが楽<sup>たの</sup>しかつたでしょう。

「もう、あんなに大き<sup>おお</sup>くなつた。」と、彼<sup>かれ</sup>は、毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>のよう<sup>よう</sup>に、家<sup>うち</sup>の前<sup>まえ</sup>の圃<sup>はたけ</sup>に出<sup>で</sup>ては、きゆうりの葉<sup>は</sup>蔭<sup>かげ</sup>をのぞいて、一<sup>いち</sup>日<sup>にち</sup>ましに大き<sup>おお</sup>くなつてゆく、青<sup>あお</sup>い実<sup>み</sup>を見ては、よろこんでいたのであります。

いくつもきゆうりの実<sup>み</sup>はなりましたが、その中<sup>なか</sup>に、いちばん先<sup>さき</sup>になつたのが、いちばん大き<sup>おお</sup>くみごとにできました。

「お母<sup>かあ</sup>さん、きゆうりがあんなに大き<sup>おお</sup>くなりましたよ。」と、二<sup>じろう</sup>郎<sup>ろう</sup>は、外<sup>そと</sup>から家<sup>いえ</sup>の内<sup>なか</sup>に入<sup>はい</sup>ると、毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>のよう<sup>よう</sup>に母<sup>はは</sup>親<sup>おや</sup>に告<sup>つ</sup>げました。

「ほんとうに、いいきゆうりがなつたね。」と、お母<sup>かあ</sup>さんはいわれました。

二<sup>じろう</sup>郎<sup>ろう</sup>は、そのきゆうりがよくてよくて、しやうがありません。

毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>それ<sup>それ</sup>に、さわつてみては、もいでもいい時<sup>じぶん</sup>分<sup>ぶん</sup>ではないかと思<sup>おも</sup>っていました。

ある日<sup>ひ</sup>のことでありました。お母<sup>かあ</sup>さんは、二<sup>じろう</sup>郎<sup>ろう</sup>に向<sup>む</sup>かつて、

「二<sup>じろう</sup>郎<sup>ろう</sup>や、あの大き<sup>おお</sup>くなつたきゆうりをもいでおいでなさい。つるをいたためないように、ここにはさみがあるから、上<sup>じやう</sup>手<sup>ず</sup>にもいでおいで。」といわれました。

二<sup>じろう</sup>郎<sup>ろう</sup>は、さつそく圃<sup>はたけ</sup>へと勇<sup>いさ</sup>んでゆきました。そして、はさみを握<sup>にぎ</sup>つて、葉<sup>は</sup>蔭<sup>かげ</sup>をのぞきま

すと、そこに大きなきゆうりがぶらさがっています。

二郎は、なんとなくそれをもぐのがしのびないような、哀れなような、惜しいような気がしてしばらくそこに立っていました。

二郎は、ぼんやりとして、夢のように、きゆうりが芽を出したばかりの姿や、やつと竹にからみついて、黄色な花を咲かせた時分を思い出すと、ほんとうにこの実をつるから切り離すのがかわいそうでならなかったのです。

二郎は、チョコキンときゆうりをもぎました。そして、それを鼻にあてて匂いをかいだり、もつと自分の目に近づけて、このいきいきとした、とりたての、新しい青い実をながめたのであります。

「お母さん、これをどうして食べるの？」と、二郎はたずねました。

「まあ、みごとな、いい初なりですね。これは食べるではありません。おまえが、釣りにいったり、泳ぎにいったりするから、水神さまにあげるのです。」と、お母さんはいわれました。

二郎は、それを聞くと、なんだか惜しいような気のうちにも、ひとつのさびしきを感じたのであります。

「水神さまは、きゆうりをたべなさるの？」

「きゆうりは、ぶかぶかと流れて、遠い遠い海の方へいつてしまうのですよ。それでもおまえの志だけは、水神さまに通るのです……。」と、お母さんは哀れっぽい声でいわれました。

二郎は、自分の名をそのきゆうりに書きました。きゆうりの青いつやつとした肌は、二郎の書こうとする筆の先の墨をはじきました。それでも、二郎は、何度となく筆で、その上をこすつて字を書きました。

「お母さん、よく書けません、これでいいですか。」と、二郎は、きゆうりを母親に示しました。

「おお、いいとも、いいとも。それをおまえは持つていつて投げておいで。」と、お母さんはいわれました。

二郎は、きゆうりを持つて、いつも自分たちのよく遊びにゆく河の橋のところへやってきました。ちようど雨上がりで、水がなみなみと岸にまであふれそうにたくさんでありました。そして悠々と流れていました。

両岸には草や雑木がしげっていました。

二郎は、ドンブリと橋の上から、手に持っていたきゅうりを水の上に落とししました。きゅうりは、浮きつ、沈みつ、二郎が欄干につかまって見ている間に、下の方へと流れていつてしまいました。

二郎は、この日、家に帰つても、きゅうりのことを思い出して、さびしそうにしています。

「いまごろは、どこへいったらう？」

二郎は、あてなく、きゅうりの行方を思っていたのです。すると晩方の空が晴れて、かなたには夏の赤銅色の雲がもくもくと、頭をそろえていました。そして、遠くの方で、雷の音がしたのであります。

二郎は、寝るときもきゅうりのことを思っていました。しかし、床に入るとじきに寝入ってしまった。

その間、きゅうりは、水に、流れ、流れて、夜の間、森のかげや、広い野原や、またいくつかの村を通り過ぎて、夜の明けたころにはもはや幾里となく遠くへいつてしまったのです。そして、まだ、そのうえにも、きゅうりは、旅をつづけていました。

その日の午後でありました。一人のみすぼらしいふうをした乞食の子が、低い橋の上に

立つて、独りさびしそうに、流れてゆく水の上を見ていました。水には、雲の影と草の葉の影が映っていたばかりです。

そのとき、一つのきゆうりが、ぶか、ぶかと流れてきました。子供は、棒を持つてきて、あわててそのきゆうりを拾い上げました。きゆうりに書かれた文字は、すっかり水に洗われて消えていました。

けれど、遠い、遠い、水上から流れてきたことだけは、乞食の子にもわかりました。なぜなら、まだ、このあたりは、風が寒くて、きゆうりの芽がそんなに大きくはならないからです。

乞食の子は、そのきゆうりを手にとつて、大喜びでした。さつそく、これから母や妹に見せようとあちらに駆け出してゆきました。

この日、はじめて、山のあちらに、雷の鳴るのを子供はきいたのであります。子供はふと途の上に立ち止まって、耳を傾けていました。北の方にも、夏がやってきたのであります。







# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「遠《とお》くで鳴《な》る雷《かみなり》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 遠くで鳴る雷

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>